

アスク

Advise and Support Care services

介護サービス相談サポートセンター
福祉サービス第三者評価機関
地域密着型サービス外部評価機関

アスクニュースレター No. 66

2017年10月31日

発行 特定非営利活動法人アスク
発行人 佐藤由紀子

〒325-0074 栃木県那須塩原市松浦町118-189
TEL/FAX : 0287-62-4310
E-mail : npo.asc@nasuinfo.or.jp
web : http://asc.nas.ne.jp/

外部評価審査委員からのメッセージ

老犬介護のスタート

藤村由美子（ふじむらゆみこ）

我が家の愛犬（と言っても、子どものいない我々夫婦にとっては子ども同様）が、この夏大手術を受けた。背中に何か膨れたものがあるので5月に病院で組織検査を受けたところ、「脂肪腫だが良性」だと言われひと安心。医師とも相談の上、手術はかわいそうなので、良性ならそのまま様子を見よう…と言うことになった。しかし、腫瘍の成長は止まらずみるみる巨大化し、徐々にわきの下までぶら下がって来て、7月にはとうとう歩行困難になり急ぎで切除することに。これが5時間にも及ぶ大手術で、13歳（人間なら70代後半くらい）の老犬には大変な負担となった。約4kgの組織が摘出され、その病理組織検査で、悪性の「軟部組織肉腫」と診断された。

この時点から、我が家は愛犬中心の生活に切り替わった。これまではずっと「お外犬」で、ほとんど手のかからない子だったが、術後安静にさせるためにどこでどのように静養させるか、家の間取りやら、性格やら、ありとあらゆる可能性を想定して、最良の方法を模索した。何度もホームセンターへ通って思案した挙句購入したケージも、本人（犬）が嫌がって入らず、結局は日中は外の犬小屋のまま、夜は台所の土間に寝かせている。

一旦は切除してすっきりした背中も、30cmの傷跡の抜糸をする頃には、早くも取り切れなかった肉腫がまた成長してきていた。左前脚は脇の下まで肉腫がぶら下がって来て地に足がつかなくなり、今は3本の足で何とか歩いている。5mも歩けば、すぐに疲れてへたばる。でも、けなげにも走ろうとする。庭をくるくると全速力で駆け回ることが大好きだったのに、風を切って走れなくなった今は、できるだけ週末は車に乗せて連れて出るようにしている。窓から顔を出すと気分が良いらしい。食事でも手作りのフードに切り替えた。癌が炭水化物を好んで食べるらしく、でんぷんで固めている通常のドッグフードではなく手作りのフードを医師から勧められたからだ。牛肉や鳥のもも肉とささみ、キャベツ、大根、ニンジン、シイタケ、などの野菜を細かく刻んで、好みの和風出汁でじっくり煮込む。これまでのフードよりも断然喜んで食べてくれるのが何よりうれしい。この食欲がある限り、不自由でも、頑張って生きてくれるだろう。

言葉が通じないので体調を聞くことが出来ないのが切ないが、できるだけ本人（犬）が嬉しい・楽しいと感じることがたくさん出来るよう、一緒にいる時間を長く持つようにしている。先代の犬も、私がカテーテルで尿を抜き取ってあげながら、最後まで自宅で看取った。市内には全国でも珍しい本格的な老犬介護施設もできているが、これから長丁場になるかもしれないけれど、彼にとって何より安心できるこの家で、最後まで家族で大切に愛情を注いであげたい。（消費生活アドバイザー）

《那須塩原発》

元気アップデイサービス「みどりの家」

那須塩原市には公民館やシニアセンター等を会場に利用し、介護予防や閉じこもり予防を目的にした15の元気アップデイサービス事業があります。シルバー人材センター等が事業の担い手になる中、唯一、NPO法人が運営するのが「みどりの家」です。

みどりの家は特定非営利活動法人ひだまり（理事長：安宅ミチ子）が地域の高齢者の居場所が必要だとして、市の事業に先駆けて平成16年4月に開設しました。その後、市の委託を受けて元気アップデイサービスになり、会場も当初市内の民家や6自治会共同利用の自治公民館を借りて実施していましたが、5年前に新緑町の新しい自治公民館が出来てそこで週2回（火・金）開催出来るようになりました。

この公民館はとてもよく考えて設計されていて、明るいホールの他に掘り炬燵を完備した和室や広い調理室があり、大きな画面のテレビ、カラオケ装置、ホワイトボード、折りたたみが出来ると大きな円卓が4台も用意されています。

参加している高齢者は74歳から101歳までの19名。他の元気アップデイはワゴン車による送迎つきですが、みどりの家では自分の脚で歩いてくることも介護予防との考え方で送迎はしていません。遠くから車を運転してくる参加者もいま

す。介護認定を受けると元気アップデイは利用できなくなるため、皆さん、自分の健康を保つことを心がけています。

みどりの家では、朝9時半頃になると三々五々高齢者が集まり、バイタルチェックを受け、脳トレのためのクイズを考え、新聞記事から時事問題を語り合い、町内在住のマッサージ師によるマッサージを受け、軽体操で身体を動かし、時々カラオケ、読み聞かせ、大人の紙芝居を楽しみ、選挙のときには一緒に期日前投票に、弁当を持ってお花見に、と融通無碍なのんびりとした空気の中で過ごしています。

みどりの家を支えるのは安宅さんを中心とした8名の仲間（この人たちもれっきとした高齢者）。NPOを立ち上げるずっと以前から町内で緑町婦人部として様々な活動を続けている人たちです。夏休みなどには子どもも集まってきて賑やかになり、参加者の介護予防に寄与しています。

参加者がホールでプログラムに取り組んでいる間に、調理室では昼食の準備が進んでいます。他の元気アップデイは弁当持参ですが、みどりの家では昼食付き（費用は自己負担ですが）です。季節柄、秋刀魚を焼く準備が進められていました。秋刀魚のEPAは脳の血液循環を改善し認知症予防にも。あっぱれ！（聞き書き：佐藤由紀子）

生きがいサロン松浦

高齢者の健康維持や介護予防、閉じこもり予防、見守りを目的にした「生きがいサロン」は、那須塩原市内に50箇所以上あり、年々増えています。運営主体は自治会や地域コミュニティ等で、月2回、1回3時間以上、参加者15名以上の要件を満たせば、市から補助金が出ます。元気アップデイとは異なり、介護認定を受けて介護サービスを利用していても参加することが出来ます。

松浦町自治会が「生きがいサロン松浦」を始めて今年で9年目を迎えました。自治公民館を利用し毎月第2・4水曜日、10時～1時に開催しています。今年度の登録者は運営委員6名を含めて62歳～90歳の37名。6名の男性もいますが、

基本的に男女同じプログラムです。

プログラムは軽体操、歌、脳トレ、ゲーム、手芸や工作、絵手紙、料理教室、講話など。料理は毎回好評で、恵方巻き、柏餅、釜の蓋まんじゅう、餃子、クリスマスケーキ（市販のスポンジの台に生クリームと苺などでデコレーションする）などが季節行事として定番になっています。手芸ではここ数年、年末に干支飾りを作っています。つい最近「終活」の講話も聞きました。

企画を練るのは自治会長や自治会役員、民生委員も構成員である6名の運営委員です。プログラムを考え、必要なら試作などの前準備をし、昼食の食材調達、当日は会の進行と昼食の調理などを

担っています。予算は食材費と手芸等の材料費、行事保険代に消えます。運営委員の多くは子どもが小学生の頃、子供会・育成会の役員などを担っていた人たちで、全くのボランティア。

運営委員も順次後期高齢者の仲間入りをしていく中、今後、会を担う人材が出てくるかが課題となっています。市の高齢福祉課の職員から、毎回の企画や準備などの世話を会員の当番制にしたら

どうか、と提案されたのですが、会を主体的に運営することは人によって向き不向きがあり、「役をやるならやめたい」と言い出す人が出てくると元も子もなくなります。「私が引き受けます」といつてくれる人が出てくるまで、あと数年、今のメンバーで頑張ることになるでしょう。生きがいサロンは運営委員の“生きがい”と健康の素でもあるのですから。（佐藤由紀子）

ケアラーズ・カフェ

ケアラーズ・カフェとはケアする人の息抜きの場です。ケアする人（ケアラー）は高齢者の介護だけではなく、障がい児・者のケアや子育てをしている人たちです。

ケアラーはケアされる人同様に24時間365日ケアのことが頭から離れません。そんなケアラーにはお茶を飲みながら世間話をしたりして、いっときケアから離れる時間が必要だと思ってカフェを始めました。

きっかけは自分のケアラー体験からでした。私は希少難病の妻を2年半自宅で介護しました。周りの人は「大変だろう」と気を使って近寄ってきません。自分から出て行かない限り外部と没交渉になってしまう恐れがあるのです。そんなことから介護者支援の必要性に気づいたのです。

毎月第2月曜10:00~12:00は那須塩原市三島の小規模多機能事業所「ぬくもり」、第4火曜10:00~12:00は那須町黒田原

の小規模多機能事業所「なでしこ」、第4金曜日13:00~15:00は那須塩原市西朝日町の老人ホーム「さわやかなすしおばら館」と、それぞれの会議室でオープンします。また、三島公民館でも第4月曜10:00~12:00にケアラーたちがオープンさせています。

「ケアする人はやって当たり前」の社会通念がケアラーを社会的に孤立させがちです。つい最近も大田原で介護殺人が起きました。ケアラーは理解と支援を潜在的に求めています。まずはコーヒーなどを飲みながらケアラー同士で語らうのがケアラーズ・カフェです。多くても10人ほどの人が集って笑顔で、時には涙ぐみながらも楽しく過ごして、自分ひとりではないことを実感してもらっています。

ご興味がある時は090-4006-8739 児玉（社会福祉士）に電話してみてください。

（児玉幸弘）

こども食堂「みんなのテーブル」

「みんなで食べるごはんはきっとおいしい！」を合言葉に、子どもだけで来てもOK、子どもと大人が一緒でもOKのこども食堂「みんなのテーブル」を今年8月から月2回はじめました。この食堂は、那須塩原市内で子育て支援の活動を続けてきたNPO法人子育てほっとねっとと、長年にわたり地域福祉に携わり、今年5月地域コミュニティ食堂を開いたNPO法人ひなたとの出会いから生まれました。育ち盛り子どもたちだれもお腹いっぱいのご飯と楽しい時間を届けたい…そのためにはどうしたらいいのでしょうか？ここに来てくれた人たち一人一人が、1つの大きなテーブルを囲んで食べるごはんをおいしいと感じたら、みんなで過ごす時間が楽しいと思ったら、周

りにいるひとりでごはんを食べている子どもたちを誘ってきてほしい、そう願っています。

主催：NPO法人子育てほっとねっと

協力：NPO法人ひなた（※）

場所：知音食堂コミュニティスペース（那須塩原駅から徒歩5分）

開催日：第1火曜日 17:30~19:30

第3土曜日 11:30~13:30

参加費：こども200円、同伴の大人400円

これまでのこども食堂の様子、今後の開催予定はNPO法人子育てほっとねっとのホームページ hottonetto.comをご覧ください。（西田由記子）

※NPO法人ひなたと知音食堂については、アスクニュースレター65号をご参照ください。

《那須町発》

みんなの居場所・ゆっくりサロン

〔主催者〕NPO法人ゆっくりサロン

〔場 所〕那須町高久丙525（山梨子）

〔理 念〕明るく家庭的な雰囲気でお年寄りから赤ちゃんまで、障がいの有無に関わらず、同じ時間を共に過ごすことで、お互いに元気をもらい合い、学び合うところです。そして地域の結びつきを大切に「困った時はお互い様」と助け合い、いつまでも安心して暮らせる地域コミュニティを創る事を目指しています。

〔沿 革〕2003年、地域通貨「ナスタ」グループの那須支部メンバー、黒田原まちづくりグループと一緒に、元酒屋空き店舗を活用して居場所を始めました。

2004年、NPO法人認証・登記。その後、「あったら、いいな」を形に、福祉有償移送サービス、助け合い事業、介護保険事業（デイホームえがお）、居宅介護支援事業に取り組む中、2017年3月高齢者の日中の居場所「ゆっくりサロン黒田原」が山梨子に移転して、共生型コミュニティカフェ「みんなの居場所・ゆっくりサロン」として再開しました。

〔活動内容〕「ボランティアさん募集！」で、共感して下さった方々と共に従来の講座に加えて、新たにランチ提供を始めました。40代～70代

15人の調理ボランティアが日替わりで、安価で栄養バランスを考えたランチを提供しています。午前中は調理ボラ、午後からは好きな講座を楽しんでいる方もいます。

みんなの居場所は、那須町「生きがいサロン」事業と総合事業の「通所型サービスB」を担っています。通所型サービスBの事業対象者は「みんなの居場所」の講座にも参加して、午前中は編み物やエコクラフト作りに取り組み、ランチを食べ、おしゃべりをしています。また地域包括支援センター主催「元気づくり応援事業」健康体操（会場：みんなの居場所）には、第2、4木曜日に通って来ています。

地域に暮らす多世代の方が自由に参加して、いろいろな方たちとの関わりから生きる意欲が高まっている様子がみられます。来られなかった人の心配をして訪問したり、食事を届けたり、一緒に買い物に出かけたりと絆が生まれ、助け合いに発展しています。

2025年には団塊の世代が後期高齢者に、2040年には団塊ジュニアが65歳を迎えます。「歩いていける所に、居場所がもっともっと出来たら、いいな」の思いを皆さんと共有していきたい、ゆっくりサロンです。（荒木純子）

〔みんなの居場所・ゆっくりサロン活動予定表〕

開設日：（月）～（金）10：00～16：00

送 迎：200円（法人：福祉有償移送サービス運転者）ほかデマンドタクシー、自家用車
通所型サービスB：利用料（300円／1回）、昼食（500円）、送迎（200円）

短時間デイ（介護予防：健康体操、生きがいサロン講座参加）

生きがいサロン講座：

月	第1・3	10:00～12:00	囲碁・将棋	13:30～15:00	習字
火	毎週	10:00～15:00	編み物		
水	第1・3	13:30～15:30	レザークラフト		
木	第1・3	10:00～12:00	エコクラフト	13:30～15:00	絵手紙
	第2・4	10:30～11:30	健康体操	13:30～15:30	ちくちく手縫い
金	第2・4	10:30～15:30	手織り		

その他、11/13（月）13：30～「みんなで歌おう！」

12/20（水）10：00～「ミニ門松づくり」

随時、希望者が集まり「そば打ち体験教室」、「歴史を聞く」を開催

今後、「カラオケを愉しむ」等を予定

第1月曜日 11：30～「介護家族の交流会」（ランチを食べながら、日頃の介護や日常生活の話等のおしゃべりの場）

目指す介護予防への新しい取り組み（共生型居場所&通所型Bに向けて）

みんなの居場所「ゆっくりサロン」は、たれもが自由に集い、ふれあい、いつまでもその人らしく、元気で笑顔になれる支え合いの場を目指します。



[連絡先] NPO法人ゆっくりサロン理事長・荒木純子 080-1168-2929
 みんなの居場所・ゆっくりサロン 0287-73-5385

《宇都宮発》

コミュニティカフェ「ソノツギ」

宇都宮大学の近くにあった空き店舗をリノベーションし、「地域の縁側」というコンセプトでコミュニティカフェ「ソノヨコ」を始めたのは15年程前になります。目的は、コミュニティビジネスの起業支援と地域の居場所づくりでした。現在は別の場所で「ソノヨコ」として細々とですがなんとか継続しています。このソノヨコ、ソノツギを事例に卒論を書き上げた学生もいます。

曜日で出店者が替わるというソノヨコ、ソノツギの基本的な仕組みは一貫して変わっていません。現時点での出店は木金土日のみであり、しかも、毎週オープンしている訳ではなく、月1回というお店もあります。つまり、かなり「ゆるい」感じで運営を続けています。スポット利用の依頼もボチボチとあり、最近、高校生のための学習支援に取り組んでいる学生グループが頑張ったり

しています。

「ソノヨコ、ソノツギは居場所なのか？」と問われると、「居場所の定義によるのでは」と応えるしかないかなと思います。木金土日に定期的にオープンしているお店の関係者にとっては、お店そのものが居場所になっているようですし、たまにくる常連さんにとっても居場所的な空間（「いたい場所」）になっているのかも。

昨年9月から、毎月最終金曜日に地域の台所「あいあい食堂」と駄菓子屋「飴ん坊」を、学生諸君が開設しています。常連となった子どもや子育て中のお母さん、20～30代の男性が入り交じっている様子を見るにつけ、「本当にいい感じ。これってみんなにとって居場所かもな。」と感じている今日この頃です。

(陣内雄次)

《特別寄稿》

コミュニティカフェを「ビジネスミックス」で成り立たせる

活力のあるまちづくり、まちなか活性化を進めるには、子どもから若者、子育て世代、シニア世代、お年寄りなど、様々な人が気軽に集まり、人と人がつながることができ、暮らしの豊かさを実感できる居場所づくりが重要だと思う。そうした「居場所」「たまり場」はコミュニティカフェなどと呼ばれ、様々な「思い」から全国各地で取り組まれているものの、安定的に維持、継続されているケースは少ないと感じている。

最近、横浜市の「港南台タウンカフェ」を運営されている(株)イータウンの代表の方のお話をお聞きする機会があり、コミュニティカフェをビジネスミックスで成り立たせる好事例として、私が学んだ点をご紹介します。

カフェの収益のみで維持費を賄えるほど、飲食店経営は甘くない。美味しいコーヒーや料理を出すことが得意なのであれば、飲食である程度稼ぐことはできるが、係わるスタッフの人件費や家賃等の固定費を安定的に生み出すには、様々なビジネスを組み合わせる必要がある。

稼ぎ頭の重要な一つとして「小箱ショップ」のレンタル棚がある。最近は自分で作品を作り、一般客に販売する人が増えている。こうした作家さんを組織できれば、棚のレンタル料(固定)と販売手数料(販売額の〇〇%)で一定の安定収入を毎月得ることができる。多い人は月2~3回棚の補充や様子見に来てくれるし、顧客の8割が主婦層なのでカフェも賑わい、作家さん同士の交流企画などに取り組むことにより、さらに輪が広がることになる。棚のレンタル料を安くし過ぎると売れない店が放置されてしまうので、ある程度のレンタル料を設定し、自然淘汰で売れ筋の店が残るように持って行くのが運営のコツらしい。

また、コミュニティカフェを立ち上げる中心メンバーが、それぞれ自分の得意分野とカフェを組み合わせる経営する発想を持つとよい。同社の代表の方の場合は、名刺や看板、ホームページのデザインや、講演・コンサルティングの仕事もさ

れているので、そうした事業の収益とカフェの仕事により、自分の人件費を生み出しているとお話であった。まちづくりに係わる様々な団体や地域の商店などから、情報誌の編集や販売促進チラシの作成など、様々なお仕事をいただくことができれば、それぞれの事業に相乗効果が得られるだろう。

「街の事務局」の仕事とコミュニティカフェの組み合わせも親和性がありそうだ。地域には、NPOや住民団体、商店会等で専従職員を雇えるほどの財政基盤は持っていないものの、郵便物取次や電話受付などの事務所機能が必要で、そのためなら一定の事務局委託費を支払っても良いと考えている団体は結構ある。カフェに共同オフィス機能を併設し、毎日交替制でスタッフが常駐し、喫茶等の提供を行いながら人と人、団体をつなぐコーディネーターとしての役割を果たすことができる。

これ以外にも、全国には様々なコミュニティカフェの事例がある。最近では、空き店舗が増えて空洞化した路地裏の空き物件をリノベーションし、カフェにコワーキングスペースを併設したり、ゲストハウス(簡易宿所)を開設してカフェやイベントスペースを併設したりするパターンも増えている。有料の市民講座、音楽イベントなどにより収益を上げたり、セレクトショップ(独自コンセプトで選んだ商品を並べる店)を併設したりするケースもある。

地域のどこかに、人とつながれる、安心できる場所があることの意義は大きい。無縁社会の中に突然放り出されてしまったと感じたとき、行く場があるだけで心が救われることになる。最近、栃木でも増えている「子ども食堂」も、コミュニティカフェの一つだと考えている。介護保険制度の改正により、介護度の低い高齢者の居場所が減らされてしまいそうだ。地域の居場所づくりの取組が地域に根ざして継続され、係わる人たちの暮らしが豊かになるために、自分も役割を果たしたいと考えている。

(田中義博)



誕生日を知らない女の子 虐待—その後の子どもたち

黒川 祥子著 集英社刊（文庫本もあり）

1728円 2013年11月26日 発行

黒川祥子（くろかわ・しょうこ）1959年福島県生まれ。東京女子大学文学部史学科卒業。業界紙記者などを経てフリーライターとなり、家族の問題を中心に執筆活動を行う。『誕生日を知らない女の子 虐待—その後の子どもたち』で第11回開高健ノンフィクション賞。著書に『熟年婚』（河出書房新社）。橋由歩の筆名で『「ひきこもり」たちの夜が明けるとき』（PHP研究所）、『身内の犯行』（新潮新書）、『セレブ・モンスター』（河出書房新社）等。

命を落としかねない深刻な虐待を生き延びた子どもたち、それを家庭で支える里親やファミリーホームを丁寧に取材し、その心情を描き出したこの作品は、第11回開高健ノンフィクション賞を受賞しました。

親などによる激しい虐待を生き延び、保護された子どもたち。しかし一件落ち着かと思えるのは大きな間違いで、その心の傷は深く、安心できる環境になってから噴出してくるのだという。

「サバイバー」と呼ばれる彼らが、生き延びてよかったというだけでは済まされない現実。しかし、どれだけ深く傷ついていても、本書にある「根っこがはれる場所」、信頼できる人がいる、安心できる場所があれば、その心の傷は軽くなるのだという。

子どもたちを受け止め、暖かい居場所となった里親さんたち。トラウマから問題行動を起こす子どもたちを支え、大切に育てる彼らの姿には本当に頭が下がる。

日本では里親になるためのハードルが高いせいか、個人での里親は少ないようだが、最近はファミリーホームと呼ばれる「小規模住居型児童養育事業」という、制度にのっとった事業として子どもを養育する場が出来ているという。

本書では、子どもたち一人一人の心情に寄り添うとともに、そうした里親さんたちの姿を、様々な苦悩も含め、丁寧に描き出している。

一人でも多くの子どもたちが、生まれてきて良かったと思えるよう、頑張っている彼らの努力が、読み手の心にしっかりと伝わってくる作品です。 (KH)



貧困の中の子ども 希望って何ですか

下野新聞子どもの希望取材班 著 ポプラ社刊（ポプラ新書）

842円 2015年3月3日 発行

2014年1月、「子どもの貧困対策推進法」が施行された。時を同じくして1月から6月にかけて下野新聞に60回連載された「希望って何ですか 貧困の中の子ども」は、反響を呼び、数々の賞を受賞した。それを加筆・修正し一冊にまとめた作品。

お金がないため子どもの可能性が奪われる「相対的貧困」とその影響を、県内の子どもたちに取材した本書は、見えにくい、また見落としている現実を私たちに突き付けてくる。

暖かい食事、清潔な衣服、教育や両親の愛情、そうした子供には不可欠なものが欠けている家庭がこんなにも多いという現実。

しかしそれは、「恥」と思う親に隠され、気付いた教師も守秘義務という鎖に縛られて、表に出てこない。助けるための制度はあっても、行政は彼らを見つけることが難しい。もう一步踏み出せないもどかしさを抱えながら、支援が進まない実態があった。

そんな中で、日光市では、行政である市と民間のNPOが情報を共有し、補い合いながら、より効果的な支援を行ってきた。NPO「だいじょうぶ」は、放課後、困難家庭の子どもたちを受け入れ、食事、入浴、衣類の洗濯、学習補助を行い、子どもたちに居心地のいい、信頼できる大人のいる「ひだまり」という居場所を提供している。こうした「居場所」は、児童虐待の予防、ひいては貧困の連鎖を防止する効果もあるという。本書の中で最も印象に残った記事であり、その取り組みに共感せずにはいられなかった。

現在、こうした居場所や子ども食堂が県内各地に作られている。誰もが持つ「善意」、それが形となって子どもたちの未来につながっていくことを、素晴らしいと心から思う。(KH)

アスクの活動から

外部評価・福祉サービス第三者評価活動

評価結果の公表(2017年10月31日現在)

《グループホーム外部評価》WAM NET (<http://www.wam.go.jp/>) に評価結果公表

えにし苑(那珂川町)2016年度調査実施分

《福祉サービス第三者評価》とちぎ福祉サービス第三者評価推進機構 <http://www.tfhs.jp/>

西保育園(那須塩原市)、江曾島保育園(宇都宮市)

このほか、保育所や特別養護老人ホームなどの評価活動中です。

《社会的養護関係施設》全国社会福祉協議会 <http://www.shakyo-hyouka.net/search/index.php>

児童養護施設、児童自立支援施設、乳児院、児童心理治療施設などの評価活動中です。

インフォメーション

介護保険制度が変わりました！！

「みんなで支えあう地域づくりフォーラム」～これからどうなる？私たちの暮らし～

日時：12月10日(日)13:00～15:30

会場：ゆめプラザ・那須 会議室 (栃木県那須郡那須町大字寺子乙2566-1)

第1部 基調講演「みんなで支えあう地域づくり」

<講師> 公益財団法人 さわやか福祉財団 会長(執行理事) 堀田 力

第2部 パネルディスカッション「自分らしく生きられるまち」

<コーディネーター> 堀田 力

<パネリスト> あかりキッチン 代表 川崎ノブ子

なるさわゆったりさろん 磯 勝代

NPO法人ゆっくりサロン 代表 荒木純子

主催：那須町、那須町生活支援体制整備協議会

共催：那須町社会福祉協議会

申込・問合せ先：那須町社会福祉協議会(電話、FAX、窓口にてお申し込み下さい。)

TEL 0287-72-5133

FAX 0287-72-0416

寄稿
歓迎

- ◆次号のニューズレターは1月発行予定です。読者からの情報や投稿を歓迎いたします。
- ◆書籍紹介欄に取り上げるのにふさわしい書籍をご紹介下さい。新本、旧本を問いません。1000字程度の紹介文を付けていただくとありがたいです。
- ◆原稿はニューズレター発行元へ、12月末までにメール又はFAXでお送り下さい。